

組踊の「悪役」をめぐって
古典組踊の役名の概念～主たる悪役の名前を中心に

鈴木 耕太

On “Villainin” in *Kumiudui*

— The concept of character names in classic *kumiudui*— focusing on the names of major villain characters —

Kouta SUZUKI

There are approximately 70 confirmed works of “classic *kumiudui*” created in early modern Ryukyu. Most of these works are categorized into the genre of revenge play. There are always “villains” in these revenge plays. The villains in *kumiudui* have the character names, which evoke the images of historic figures, such as those related to “*amawari*,” “the jana tribe,” and “*janaoyakatarizan*.” However, these names only give the image of the historic figures themselves, and neither the works or the characters reflect the historical facts. Having verified all of the 27 revenge plays in classic *kumiudui*, the figures that can be listed as motifs of a villain are the aforementioned three figures only. Thus, it can be said that in *kumiudui* the names of historical figures (proper nouns) are not used in the concept of the character names for villains.

However, among the verified works, a *kumiudui* called “*gosamarutyu-giden*” reflects the actual historical facts. In this work, both character names and their stories perfectly correspond to their respective historical facts. Considering on the basis of newspaper articles and other materials from the Meiji Era, it is suggested that this work was potentially a novel *kumiudui* newly created during the Meiji period. Hence, it can be pointed out that “*gosamarutyu-giden*” is a work, which had an influence on Ryukyu historical plays (Ryukyu *shigeki*) and other plays born during the Meiji period, and, from the aforementioned concept of villain, in *kumiudui* it is suggested that the works reflecting the historical facts can be classified as novel *kumiudui*.

組踊の「悪役」^{ヴァイラン}をめぐる

— 古典組踊の役名の概念（主たる悪役の名前を中心に） —

はじめに

現存する古典組踊には約七〇の作品がある。その中で最大数のジャンルの作品があるのは「仇討物」である。これは、「忠・孝・節・義」を重んじた封建社会である近世琉球において創作する演劇として、悪が善によつて誅されるという内容はわかりやすく、作劇しやすかつた結果であろう。仇討の歴史的事実のない琉球において、組踊に多く「仇討物」があることについて、先考研究では、封建倫理の徳目である「忠」や「孝」を演ずること、さらにはそこに「首里」の存在が見え隠れすることを指摘し、当時の倫理観、さらには王府の体制の具現化を指摘している。

組踊における「仇討物」の代表的作品は、玉城朝薫の「護佐丸敵討」、田里朝直の「萬歳敵討」であろう。現在でも上演回数が多く、どちらも「芸づくし」の要素があつて、観客を楽しませている。この二作品は、殺害された父親の仇討を息子達が行う、という筋である。組踊において、殺された者の子ども達のみで行われる仇討は、「姉妹敵討」を入れても三作品だけである。多くの「仇討物」は、良き統治をしていた按司が、ある日、他間切の按司や、自分の家臣に理不尽に弑され、生き延びた若按司と、各地にバラバラになつた家臣達を集めて仇を討つ、という若按司と家臣が一体となつて仇討をするという内容である。

本稿では、組踊の中で最大のジャンルである「仇討物」の主たる悪役に焦点を絞り、『球陽』などの歴史記述などを参考にしながら、その役名のモチーフを探ることを目的としている。「主たる」というのは、良い按司を理不尽に

鈴木 耕太

殺す、作品中に登場する悪事の手謀者を指している。本論中の「悪役」はその意味で用い、その手謀者に仕える臣下までは対象とはしない。今回研究対象とする組踊作品は、近世に創作されたと思われる以下の二七作品とした。

「護佐丸敵討」	「万歳敵討」	「本部大主（北山若按司敵討）」
「伏山敵討」	「大川敵討」	「忠士身替之巻（八重瀬）」
「東辺名夜討」	「姉妹敵討」	「久志之若按司（天願若按司敵討）」
「忠臣義勇」	「探義伝敵打」	「大浦敵打（高山敵討）」
「智取敵打」	「具志川大軍」	「屋慶名大主敵討」
「糸納敵討」	「大湾敵討」	「本部大腹」
「西南敵討」	「高那敵討」	「忠孝夫婦忠義」
「南山崩」	「多田名大主」	「忠臣反間の巻」
「矢藏之比屋」	「父子忠臣之巻」	「護佐丸忠義伝」

1. 「護佐丸敵討」の悪役「あまおへ」と「阿麻和利」について

「護佐丸敵討」は玉城朝薫が一七一九年の尚敬王冊封において最初に上演された作品である。言わば組踊の歴史上、初めて上演された作品である。徐葆光の『中山伝信録』の重陽宴の項に「鶴亀二児、父ノ仇ヲ復スルノ故事」と「鐘魔ノ事」が上演されたことが記されているので明らかである。

組踊「護佐丸敵討」は、琉球史で有名な「護佐丸・阿麻和利の変」をモチーフにした作品であることはよく知られているところである。それは、主人公となる若衆二人は「護佐丸」という歴史上の人物の遺児である、という内容からも見てとれる。さらに外題の「護佐丸敵討」からも、それだけで護佐丸の敵討が物語の主題である事がわかるよう

になつてゐる。

琉球の正史『球陽』によるとこの事件は「阿麻和利、護佐丸を讒害す」と「夏居数、旨を奉じて阿麻和利を攻め滅す」と尚泰久王代の出来事として二項目にわたつて記されている。⁴ その内容には前者が、護佐丸は「婦人及び二子俱に墓前に在りて自己殺害す」とあり、逃げるのは「一養女」が「一少子を抱き国吉邑に逃去」するとある。そして後者は「王、夏居数に命じて大将と為し、勝連を征討せしむ」「居数、凱旋し命を復す」とあつて、阿麻和利を討つたのは「夏居数」（鬼大城）が率いた首里軍であつたことが記されている。

『毛氏元祖由来伝』には「爰に三男は未だ乳を不離故護佐丸公乳母を被招呼汝は其の幼児を抱き早く遁れ落ち何方にても深く忍び身を隠し此難を避くへし」としている。毛氏のその後について、琉球史では三男の盛親が豊見城の惣地頭職になつて再興を果たすことになることとなつてゐる。

では、組踊の内容はどうであらうか。この組踊において「護佐丸」は冒頭に登場する悪役「あまおへ」の台詞に次のように登場する。

道障しゆたる

護佐丸も殺ち、

なし子茹捨てゝ、

すで子茹捨てゝ、

肝障り無らぬ、

道障り無らぬ。

そして、遺児達の登場する際の名乗りにも

護佐丸のおと子

鶴松亀千代。

親の護佐丸や

罪科も無らぬ。

勝連の按司の

かうずみしやうち、

親と一門

なし子まで、

さがし出され

殺されて

(いずれも引用は『校注琉球戯曲集』より)

と、「護佐丸」が殺されたことが語られ、物語はスタートする。「護佐丸」は登場しないものの、繰り返し台詞で述べられるのである。そして、悪役の名前は「あまおへ」であり、護佐丸の遺児である「鶴松」と「亀千代」兄弟に仇を討たれ、物語はハッピーエンドとなる。

歴史で語られる「護佐丸・阿麻和利の変」では『球陽』においても、また『毛氏先祖由来伝』においても生き残る子供は三男である。組踊では生き残るのは長男と次男、というように脚色されている。これこそ兄弟二人に仇討させる「曾我物」の要素を持たせるために創られた玉城朝薫の脚色の妙である。殺された長男と次男の名前は、「毛氏家譜」には「夫人与二子^{長男身瑞、男身瑞種、二八童名唐名俱無伝}」とあるので、童名も唐名も不明である。さらには生き残った三男の名前は「童名思徳唐名麟章號瑞源行三^{生日卒、日無伝}」とあり、三男の童名は「思徳」であることがわかる。そして、繰り返すが、悪役の名前は「あまおへ」である。いわずもがな「鶴松」「亀千代」「あまおへ」という役名は朝薫の創作したものである事がいえるのである。

悪役の「あまおへ」は「阿麻和利」と読みが似ている。このように読みの近い役名を付けることで、作品上で語られる「護佐丸」と結びつけ、歴史上の事件「護佐丸・阿麻和利の変」を想起しやすくする作用を持っていると言えそうだ。これは、恰も歴史上の赤穂事件の浅野家の家老「大石内蔵助」が、仮名手本忠臣蔵では「大星由良助」と読みの近い役名がつけられているのを彷彿とさせる。仮名手本忠臣蔵は赤穂事件を題材として「太平記」にその世界を借りて創作したものである。浅野内匠頭は塩谷判官、吉良上野介は高師直という役名で作品に登場する。塩谷判官も高師直も「太平記」に登場する人物である。二人のキーパーソンを「太平記」からそのまま役名として取って、重要人物の「大石内蔵助」は読みの近い人物名を付けて、実際の赤穂事件を想起させる、という手法に酷似している。同じ近世の芸能である浄瑠璃のこのような技法を朝薫が取り入れている、と言っても過言ではなからう。

「護佐丸敵討」において登場する人物のすべては創作されたもので、登場しない「護佐丸」だけが歴史上の人物である。悪役は「阿麻和利」ではなく「あまおへ」である。朝薫の悪役の命名からは、おおよそ次のような概念が読み取れるであらう。

『球陽』『毛氏元祖由来伝』『毛氏家譜』と組踊「護佐丸敵討」との登場人物名の齟齬からは、朝薫は組踊を創作するにあたって、その登場人物に対して、事実上の実名を用いていないことが言える。すなわち、朝薫組踊における悪役の役名の概念は、歴史や伝説上の特定の人物名の使用を避けている、ということが推測出来るだろう。

2. 悪役「謝名」について

「姉妹敵討」と「久志之若按司（天願若按司敵討）」に出てくる悪役「謝名の大主」について考えてみたい。実演家などに聞いてみると、組踊では「謝名」といえば「悪役」というほど悪役の印象が強い名前である。しかし、今回調査対象とした二八作品の中では右に挙げた僅か二作品に登場する悪役である。他の作品には「多田名大主」に登場する悪役「多田名大主」の臣下として「謝名の子」が登場する。仇討物以外の作品には「二山和睦」に「謝名の大主」が登場する。「二山和睦」のこの人物は主人公の「与座大主」を南山に帰すまいとする、主人公の障壁となる人物と

して描かれている。

悪役以外に「謝名」と名のつく人物には、「萬歳敵討」の主人公である「謝名の子」、「本部大主（北山若按司敵討）」の若按司と共に仇討に協力する「謝名の大王」の二役が挙げられる。仇を討たれる悪役の「謝名」の数が仇を討つ方の役より多いことから、組踊では「謝名」というとマイナスイメージを持やすいことが考えられよう。

では、「謝名」の悪役イメージの基となるものは何であろうか。『球陽』には尚寧王四年（一五九二年・萬曆二十年）の項目に「四年、毛鳳儀達、謝名一族を征討す」とあり、毛鳳儀（毛氏池城家三世の池城安頼）らが謝名という一族を滅ぼしたことが記されている。以下に引用する。

首里西州の謝名一族謀反す。王毛鳳儀（池城親雲上安頼）・毛継祖（東風平比嘉親雲上盛統）。金応照（摩文仁親雲上安恒）等に命じて、往きて之れを討誅せしむ。鳳儀等命を奉じ、義兵を率領して行きてその宅に到り、四面より環り攻め、水洩も通ぜず。謝名、固く家庭を守り防備甚だ密にして、敢へて出でて戦はず。是に於てか、鳳儀等力の施すべき無く、火を矢に繋ぎて彼族、庭に出て敵を迎ふること、数次にして勝敗未だ分れず。風儀等、鎗を揮ひ、劍を振ひ、力を励まし勇みを奮して相戦ふこと、亦数合にして遂に其の将一名を殺す。則ち族党殺戦、寡、衆に勝たず、尽く擒擄せらる。風儀等大いに捷功を得て持て聞す。聖上大いに喜び、各々紫冠を賜ひて以て褒嘉を加ふ。

この記事では、池城親雲上安頼、東風平比嘉親雲上盛統、摩文仁親雲上安恒の三人が首里の兵を率いて謝名を討ちに行ったことがわかる。しかし、謝名の謀反の内容は語られていない。この記事と同じ内容が毛鳳儀の家譜に見られるので参照する。

万曆二十年壬辰五月十九日謝名一族謀反 上命毛氏東風平比嘉親雲上盛統金氏／摩文仁親雲上安恒安頼三人

時安頼為当役番權歸故時人今日權歸
池城其所用長船伝至今以爲家室

為討大将拾是／三人統領義兵堅旌旄羅弓矢至其宅四面環攻謝名固守而不敢出戰拾是繫矢於矢
／放彼屋上其一族乃出庭迎敵彼此互相呼名合戰數次然而勝敗未分安頼揮鎗与安恒／盛統振威惡戰亦數合各殺其將
而尽擒其与党三人得捷以聞 上大悦各可紫冠。

家譜には日付が「五月十九日」であること、安頼は当時、鎗の hands で「揮鎗池城」と呼ばれていたこと、そして安頼の鎗は家宝として池城家に保管されていたことなどがわかる。しかし、ここにも謝名の謀反の内容は語られていない。しかしながら、謝名一家を征誅するために、三名の者（中には鎗の名人）を大将にして首里軍を率いて謝名の家を取り囲み、火矢を放って、出てきた所を仕留めるなど、尚寧の時代にありながら、首里城下で大きな戦いを取っている。『球陽』や池城親雲上安頼の家譜の記述では、三人の大將率いる首里軍をもってしても謝名は容易に討ち取っていない。それどころか、東風平比嘉親雲上盛統の家譜には「即放火焼舎謝名出ノ宅死戦盛統身負疵而奮勇相戦」¹⁰とあり、盛統は負傷したことまで見えることから、謝名もなかなかの手練れだったことがうかがえる。

『沖縄一千年史』にも「尚寧王紀」にこの事件が記されているが、真境名安興は「蓋し叛せしことに就きては正史及び家譜等に伝ふる所簡にして要を得ず。且つ其叛因も詳ならざれども、倘し尚家を覆滅せん大志を抱きしならば進んで攻勢に出づべかりしに、初めより孤邸に死守せるより見れば、或は当時の政治に不平を懷き、之れと抗争せしに過ぎざりしならんか」とその見解を述べている。¹¹

この家は現在の首里桃原町にあつて、久手堅憲夫によると「謀反屋敷」（ムフンヤシチ）と伝えられているらしい。¹² 謝名は当時、尚寧の政治に対する不満から謀反を起こそうとしたところを、見せしめのために池城親雲上安頼らの率いた首里軍に誅されたことがうかがえる。

この尚寧王の統治時代に、もう一人、謝名という人物がいる。鄭廻、謝名親方利山である。『球陽』には「本国、素薩州と隣交を為し、紋船の往来は、今に至るまで、百有余年なり。奈んせん、権臣謝名の言を信じ、遂に聘問の礼を失す。是れに由りて、太守家久公、特に樺山氏・平田氏等を遣はし、来りて本国を伐つ」とあつて、謝名利山の言葉信じたが為に、礼物を携えて薩摩と往来することを辞めてしまい、怒りを買ひ、琉球に薩摩の軍勢が押し寄せた、ということになっている。また、『喜安日記』にはこの事件について、「今度琉国の乱劇の根本を尋るに、若那一人の所為也。其上佞臣也」¹³としており、薩摩によって琉球が伐たれた原因、さらにはその責任は謝名親方利山その人にある、ということになっている。『喜安日記』には彼が「慶長十六年）九月十九日申時斗、首を刎られけるとぞ聞へける」

と斬首されたことが記載されている。鄭氏家譜にも「(万暦)三十九年辛亥被殺於甌島」とあり、万暦三十九年も慶長十六年も西暦一六一一年の出来事であるので、「家譜」と『喜安日記』の記事は符合する。

みてきたように、「謝名」と名のつく人物の一人は、「謀反屋敷」の謝名一族が国王に謀反を起こして誅され、もう一人の謝名は親方利山、薩摩に対して無礼を起こさせた張本人となっている。その事件の起きた時期は、いずれも尚寧王の統治時代であり、「謀反屋敷」と薩摩侵攻の時代の開きは十七年しかない。その間、事件らしい事件は起きていない。また、重要なのはこの二つの事件を含め、琉球の歴史書が記録・編纂されるのは一六五〇年の『中山世鑑』に始まる。ここに登場する二人の「謝名」の事件も、事件が終わって時間が経ってから歴史書に記載されたのである。このことから、近世末期の琉球人において「謝名」という名は、歴史に登場する実際の悪人像を想起させる役名として捉えられたと考えられる。そのような名前は、組踊という演劇に悪役として登場させるには、うってつけだったのではないだろうか。

3. その他の組踊における悪役と「護佐丸忠義伝」について

これまで、「護佐丸敵討」の「あまおへ」、「姉妹敵討」と「久志之若按司(天願若按司敵討)」に出てくる悪役「謝名」について考察してきた。次は、これまでで取り上げていない仇討物に登場する悪役の名前を見ていこう。以下に作品名と悪役の一覧を挙げる。

万歳敵討

高平良御鎖

本部大主(北山若按司敵討)

本部大主

大川敵討

谷茶按司

忠士身替の巻

八重瀬按司

東辺名夜討

東辺名按司

伏山敵討	天願按司
探義伝敵打	石川大主
聳取敵打	内間赤鬼
大浦敵打（高山敵討）	大浦大主
具志川大軍	摩文仁按司
本部大腹	本部大腹
屋慶名大主敵討	屋慶名大主
忠孝夫婦忠義	神谷大主
糸納敵討	北山の子
大湾敵討	藏波大主
西南敵討	呉屋の大主
高那敵討	高那大主
多田名大主	多田名大主
忠臣義勇	大里按司
忠臣反間の巻	立山按司
南山崩	神谷
父子忠臣之巻	東辺名按司
矢蔵の比屋	矢蔵の比屋
護佐丸忠義伝	阿麻和利

組踊の仇討物の悪役を俯瞰してみると、作品ごとに悪役の名前にはバリエーションがある事がうかがえる。その中

でも一目瞭然であるのは、悪役はほとんど「按司」より身分の低い「大主」となっている。また、「按司」と名乗っている、もともとは「大主」という身分だったが、按司を斃して「按司」と今は名乗っている、と作品中で語るケースもある。

それから、前項で取り上げた「謝名」のように複数の作品に悪役として登場するのは「東辺名夜討」「父子忠臣之巻」の「東辺名按司」くらいであり、その他は同じ名前の悪役が登場しない。「東辺名按司」については、特に「謝名」のような口碑伝承、史料の記述は見当たらない。関係性は薄いと思うが、『遺老説伝』に喜屋武間切東辺名村の話として、「樽良知」という怪力を持った人物が「大里鬼」というこれまた怪力男と力比べをする話と、喜屋武間切東辺名村の「奥間里之子」が与論と沖永良部の二島に出征するとき同行し、活躍するが矢を眉間に受けて帰国後に死ぬ、という話があるくらいである。史料などからは「東辺名按司」という名前の人物で悪名高い人物は見られない。

また、挙げた組踊のタイトルには悪役の名前を冠した者が意外と多いこともうかがえる。例を挙げると「本部大主(北山若按司敵討)」「東辺名夜討」「大浦敵打(高山敵討)」「本部大腹」「屋慶名大主敵討」「高那敵討」「多田名大主」「矢藏の比屋」の八作品に及ぶ。それ以外のタイトルには、仇討の方法をタイトルにしたもの(「忠士身替の巻」「伏山敵討」「忠臣反間の巻」「智取敵打」)がある。

前項で挙げた「あまおへ」「謝名」以外は歴史上の人物などをモチーフにしたとみられる悪役が見当たらない。組踊を作った人々の創作力の賜と言って良いか。しかし、この一覧の最後に挙げている「護佐丸忠義伝」には少々問題がある。この作品は先に挙げた「護佐丸・阿麻和利の変」を題材にした組踊で、『球陽』や『毛氏元祖由来伝』の内容をそっくりそのまま組踊にしたような作品である。登場人物には「鬼大城」も出てきて、さらに、他の組踊には見られない「首里の按司」、つまり国王が登場するのである。

「護佐丸忠義伝」が収録された組踊本は、『琉球脚本組踊集』下巻(一九二〇(大正九)年)『組踊』第四卷(一九二三(大正十二)年)、『組踊』第三卷(一九二八(昭和三)年)の活字本三冊だけが確認されており、筆写本は見当たらない。また、新聞には明治四十三(一九一〇)年五月十二日・十三日の両日に「忠臣護佐丸」という内容で『毛氏元祖由来伝』

の「護佐丸・阿麻和利の変」が紹介されている。さらにそれ以前の「琉球新報」の記事に「組踊一番を演したり所望者の意は有田親方の作の二童敵討の積りなりしならんか嘗て本社より発行したる阿摩和利征伐記を脚色して護佐丸義臣伝とか何とか名つけたる新作をやりたるハ遺憾なりき」と出ている。この記事は一九〇一（明治三十四）年の六月十九日のもので、活字本の出版並びに「忠臣護佐丸」の記事が掲載されるより早い。記事中には「有田親方の作の二童敵討」と、恐らくは「玉城親方」の間違いがあったり、「護佐丸義臣伝とか何とか名つけたる新作」と作品名がうる覚えであったりと、記者があまりこの「新作」に対して興味が無い様子が見てとれる。しかし、文章中に出る「阿麻和利征伐記」が現存していないものの、それを脚色した新作というのはこの「護佐丸忠義伝」ではないかと推測する。その理由は三つある。一つは、活字本だけに作品が収録されているということと、二つ目は作品中に「但し護佐丸自ら妻子を切り殺し最後に無邪気なる乳呑児を刺さんとせしを」や「但し供三人切腹場景悲惨を極む此の間太鼓にて鳴物」など舞台を見ているかのような詳細なト書きが多くあること、三つ目は収録されている三つの組踊本の内容が、台詞、音曲、ト書きにいたるまで異同がない、ということである。したがって、この「護佐丸忠義伝」という作品は、近世期に創作された「古典組踊」とは言えず、明治になってから創作された「新作組踊」である可能性が伺えよう。

4. まとめ

古典組踊の仇討物の悪役についてそのモチーフを考えると、**「謀反屋敷」**の謝名一族と謝名親方利山の悪名の高さがクローズアップされ、組踊の悪役に命名されたと思われる**「謝名」という人物が挙げられる**。作品中でも「謝名が悪欲の罪深さあすや」（久志之若按司）、**「謝名や太刀打に名を得るとるつはもの」（姉妹敵討）**と悪欲が深く、武芸にも秀でている様子が語られるところは、『球陽』その他の家譜資料に登場する謝名一族及び謝名親方利山を彷彿とさせる。しかし、古典組踊における悪役の役名は、歴史書などに登場するそのままを役名として登場させるのではなく、あくまでも**「あまおへ」や「謝名」**など、役名を聞くだけで**「あまおへ」は「阿麻和利」、「謝名」は「謝名親方利山」**など観客側で想像し、楽しむものとなっていることがうかがえた。また、それ以外の古典組踊における悪役は、特に

歴史にも登場しない人物の名前が役名として使用されている。悪役に「固有名詞」を付けるのを避けているように思われる。組踊そのものがフィクションであるため、歴史書に見られるような「固有名詞」を付ける必要がない、というのがその理由であろう。これは「あまおへ」や「謝名」がそのモチーフを持っていながらも、歴史書通りの物語を組踊で演じていないことと同じで、組踊において、悪役の役名の概念は、固有名詞や歴史上の人物の名前を使用しないという事が言える。

そして明治に作られたであろう「護佐丸忠義伝」は、歴史書からそのまま役名をとり、歴史書通りの物語を組踊に創作している。これは明治期に誕生する琉球史劇や方言せりふ劇に影響を大きく与えるものであると考えられ興味深い。前述した古典組踊における悪役の概念をもとに考えると、歴史書と同じ役名を使用している組踊は、「護佐丸忠義伝」のように新作である可能性がうかがえる。今後はそのような明治期になって創作されたであろう組踊に注目し、その作劇法から沖縄芝居や史劇が誕生していったという青写真を描けるかもしれない。

使用テキスト（年代順）

- 『校注 琉球戯曲集』……………護佐丸敵討・萬歳敵討・大川敵討・忠臣身替
- 『恩河本組踊集』……………屋慶名大主敵討・本部大腹
- 『兼島信備本組踊集』……………義臣物語・北山崩・東辺名夜討・姉妹敵討・天願若按司敵討・具志川大軍
- 『沖縄小説集』……………探義伝敵討・智取敵討
- 『與那覇政牛本組踊集』……………高山敵討
- 『宜野座村字松田（古知屋）の組踊集』……………糸納敵討・高那敵討
- 『工工四附 組踊集』……………忠臣反間の巻・伏山敵討
- 『宮里公民館所蔵本』……………西南敵討・忠臣義勇
- 『沖縄郷土古典芸能組踊全集』……………多田名大主・矢蔵の比屋
- 『護得久本組踊集』……………大湾敵討
- 『琉球脚本 組踊集（下巻）』……………護佐丸忠義伝

『組踊集』第二……南山崩
『沖繩県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』……父子忠臣之巻

参考資料（組踊本関係）

- 『新本家所蔵本組踊集』八重山博物館所蔵 一八五九年
尚家文書31『組躍』那覇市歴史博物館蔵 一八六七年
『琉球詞曲』京都大学琉球資料 一八七九年
『今帰仁御殿本組踊集』琉球大学附属図書館蔵 一八九一年
『久志村所蔵本組踊集』久志公民館所蔵 一八九一年
『琉球組踊』東京教育大学所蔵 一八九五年
『与那覇政牛所蔵本組踊集』一八九六年
『語学材料第二』琉球大学伊波文庫 一八九六年
『恩河本小禄御殿本組踊集』琉球大学附属図書館蔵 一八九八年
『兼島信備所蔵本組踊集』一九〇六年
『琉球新報』（明治四十年四月五日） 一九〇七年
『琉球大観』台湾大学図書館蔵 一九〇九年
『琉球脚本組踊集』下巻 ハワイ大学宝玲文庫 一九二〇年
『比嘉信三本組踊集』一九二二年
『琉球新報』（大正十四年三月十八日）宮城真治資料・名護市博物館所蔵 一九二五年
伊波普猷『校註 琉球戯曲集』春陽堂 一九二九年
當間清弘『沖繩郷土古典芸能組踊全集』三ツ星印刷所 一九五五年
『沖繩県史料 前近代8 芸能Ⅰ』一九九五年
『沖繩県史料 前近代11 芸能Ⅱ』一九九八年
『伊舍堂用人所蔵本組踊集』書写年代不明
『喜舎場孫進所蔵本組踊集』石垣市立図書館蔵 書写年代不明
『組踊集』多良間村教育委員会所蔵 書写年代不明

『豊川善包所蔵本組踊集』石垣市史編纂室 書写年代不明
『組踊集』琉球大学宮良殿内文庫 書写年代不明

参考文献・参考論文

- 新垣正雄 『護佐丸全集』上巻 沖繩教文出版社 一九九六年
池宮正治 解説『喜安日記』榕樹書林 二〇〇九年
伊波普猷 『校注 琉球戯曲集』(復刻版) 榕樹社 一九九二年
大城學 『沖繩芸能史論』砂子屋書房 二〇〇〇年
沖繩県教育庁文化課編 『沖繩の組踊(Ⅰ)』沖繩県文化財調査報告書第72号 一九八六年
沖繩県教育庁文化課編 『沖繩の組踊(Ⅱ)』沖繩県文化財調査報告書第82号 一九八七年
沖繩県立芸術大学附属研究所編 『鎌倉芳太郎資料集(ノート編)』第三巻歴史・文学』二〇一五年
嘉手納宗徳編 『球陽外巻 遺老説伝』角川書店 一九七八年
球陽研究会編 『球陽』角川書店 一九七四年
久手堅憲夫 『首里の地名』第一書房 二〇〇九年
當間一郎 『組踊写本の研究』第一書房 一九九九年
真境名安興 『沖繩一千年史』松尾書店 一九六五年
矢野輝雄 『組踊への招待』琉球新報社 一九九九年
矢野輝雄 『組踊を聴く』瑞木書房 二〇〇三年

註

1. 琉球の正史『球陽』には仇討の記録がみられない。しかし、『遺老説伝』には米次按司夫人の仇討ち、宮古島の浦島の子、兼久の行つた父の仇討ちの二つの話がある。『遺老説伝』は説話集の性格が強いため、ここでの「仇討」は歴史的事実と捉えないこととする。
2. 當間一郎は「仇討物」が多くある理由を「忠孝節義」の思想が王府に強くあり、またその思想が村々に広く浸透していった、としている(當間一郎『組踊写本の研究』二五七頁)。大城學も「仇討物」が多くある理由として、琉球王府の体制倫理を組踊の中に具現化したためである、としている(大城學『沖繩芸能史論』四四五頁)。矢野輝雄は、倫理的徳目が重視されていた事以外にも、「仇討物」が多く作られた理由として、余興として動きが多い作品だからである(矢野輝雄『組踊への招待』一七四頁)としている。

3. 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料編 第1巻3 冊封使録関係資料』（那覇市役所、一九七七、三）所収
4. 球陽研究会編『球陽』項目番号一〇六・一〇七（角川書店一九七四年）
5. 軍記物の文学『曾我物語』をもとにした、兄弟の仇討を主題とした戯曲。能・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎に「〇〇曾我」というような外題が付いている。その数は多く、『歌舞伎辞典』などでも「我が芸能史上最も数の多い演目を持つ」と紹介されるほどである。
6. 『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第三巻歴史・文学』（毛氏家譜（豊見城））より。六二六頁。
7. 前註「毛氏家譜」より。
8. 球陽研究会編『球陽』項目番号二三八（角川書店一九七四年）
9. 毛氏家譜（池城親方）三世・安頼池城親方（前掲『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第三巻歴史・文学』六二二頁。
10. 毛氏家譜（豊見城）五世・盛統豊見城親方（前掲『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第三巻歴史・文学』六二八頁。
11. 真境名安興『沖繩一千年史』頁。
12. 久手堅憲夫『首里の地名』桃原村の項目より。
13. 池宮正治『喜安日記』六七頁。
14. 「琉球新報」明治三十四（一九〇一）年六月十九日 二面より。